

中学校における道徳の時間の評価に関する研究

高知大学大学院 総合人間自然科学研究科 教育学専攻 学校教育コース 内田純一研究室
香美市立香北中学校 教諭 田村綾

1 はじめに

(1) 道徳の時間の現状と課題

道徳教育の要である道徳の時間において、その特質を生かした授業が行われていない場合があることや、発達段階が上がるにつれ、授業に対する児童生徒の受け止めがよくない現状があること、学校や教員によって指導の格差が大きいことなど、多くの課題が指摘¹されている。また、道徳の時間は、各教科等に比べて軽視されがち²で、道徳教育の要として有効に機能していないことも多く、このことが道徳教育全体の停滞につながっているとの指摘もある。

(2) 「特別の教科化」にあたって

「特別の教科」化には、軽視されがちであった「道徳の時間」が本来の特質を生かした授業へと実質的に変換される、という期待が込められている。教材を読むことを中心にした従来のスタイルから脱却し、問題解決や体験学習の手法を新たに取り入れるなど、「多様で効果的な指導方法の積極的な導入」³が示された。これについて、「読む道徳」から「考える道徳」へというキャッチフレーズが報道⁴される中で、これまでの授業方法等の効果をどう評価し、今後どのような授業を構築していくのか、学校現場に混乱が見られるのも事実である。実際に、「道徳の授業を行為の指導に転換してもよいのか」という教員の声も多く聞かれる。また、教員を対象とした研修の中でも、「新しい道徳の指導方法」への関心が高いように感じる。これと同じく、特別の教科化にあたって、評価の方法にも関心が高まり、様々な実践が広がりつつある。このような背景から、今、道徳の時間の評価の在り方を明らかにすることが、道徳の時間の改善に貢献するのではないかと考える。

2 研究の目的

「道徳の時間」の評価を複数教員で行うことで、授業力が磨かれ、生徒理解が深まる。エバリュエーターとしての教師を支えているのが「見える力」であり、振り返りの省察や見通しの省察にその力が生かされる（秋田・佐藤 2006）。つまり、教師にとって評価は、テストの点数や成績をつけるだけの作業ではないのであり、この評価活動全体を支えているのは、教育的に重要なできごとについて解釈することのできる教師自身の眼なのである。「道徳の時間」の評価の意義については、先行研究において明らかにされてきたが、その評価が、「生徒理解」と「授業改善」に効果的に機能するための要

¹ 中央教育審議会(2014)「道徳に係る教育過程の改善等について(答申)」2頁で、道徳の時間における課題と早急な改善の必要性が示された。

² これらの課題は、東京学芸大学による調査で明らかにされており、本研究では、これらの調査などを考察し、道徳の時間における課題について明らかにした。

東京学芸大学(2012年2月)「総合的道徳教育プログラム」推進本部 第1プロジェクト『道徳教育に関する小・中学校の教員を対象とした調査—道徳の時間への取り組みを中心として—』は、「小学校および中学校の教師を対象として、道徳教育、とりわけ道徳の時間に関する意識や取り組みの状況などについて明らかにする。」ことを目的として行われた調査である。

東京学芸大学(2014年2月)「総合的道徳教育プログラム」推進本部 プロジェクト『過去の道徳授業の印象に関する調査—教職科目「道徳の指導法」の受講生を対象として—』は、授業の構成要因である児童・生徒の視点での「印象や評価等から得られる示唆を生かして授業改善を図ることが重要である」との意図から、「学生側(過去の児童・生徒)の印象を網羅的に把握することで授業設計に関する研修・改善の参考とし、今後の量的研究への足がかりとすること」をその意義として行われた調査である。

³ 中央教育審議会.(2014)「道徳に係る教育課程の改善について(答申)」を参照のこと。

⁴ 例えば、日本経済新聞では、「読む」→「考える」道徳へ文科省、小中で「教科化」指導要領改訂案、の見出しで報じられた。

http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG04H4E_U5A200C1CR8000/

件はまだ明らかにされておらず、効果的な評価がなされるためには、これを解明することが必要である。

そこで、これらの要件を明らかにするために、第1研究では、授業評価アンケート、授業中の発言の評価、連想法⁵による評価と富岡(2015)によるルーブリック評価(表1参照)を行い、生徒の道徳性の変容と授業の効果を把握するための評価としての有効性について検討することを目的とした。第2研究では、計量的な方法で評価基準を作成することを目的とし、生徒の感想文をKH Coder⁶を使用して計量テキスト分析し、記述語の例を評価基準とするルーブリックを作成した。第3研究では、ルーブリック評価の有効性について検討することを目的とし、第2研究で作成したルーブリックを用いて、複数教員での授業の振り返りを行った。本研究では、この振り返りでの教師の語りを分析し、効果的な評価を行うために必要な教師の資質・能力について明らかにし、評価が授業改善と生徒理解を促すことの検証を、主要な目的とする。

表1「今日の道徳の授業で学んだこと」を評価するルーブリック(富岡 2015)

段階	内容
A	道徳的価値について触れた記述はない。考えをもつことや意見を言うことの大切さ等について書いている。 ※「みんなの意見が聞けてよかった。参考になった」「意見が言えてよかった」
B	資料中での人物の言動や出来事に触れているが道徳的価値を自分自身のこととして捉えていない。 ※「主人公の判断は正しかった」「主人公の判断は正しくなかった」「主人公はあるような行動をとるべきではなかった」
C-a	道徳的価値について気がついたり、理解したりしている。 ※「学んだ」「気がついた」
C-b	道徳的価値について気がついたり、理解したりしている。しかし、おろいとは異なる道徳的価値についての理解である。
D-a	道徳的価値について理解し、その価値に対して自分を見つめ、さらに、その道徳的価値を実践しようとする意欲の記述がある。

3 研究内容

(1) 第1研究

ア 調査の概要

「道徳的価値について、自分のこととして捉え、これからの生き方に生かしていこうとする思いや課題が培われる」ための工夫のある授業を行い、「生徒は道徳的価値について自分のこととして捉え考えることができていたか」「教師は生徒に自分との関わりで考えさせられるような授業ができていたか」を様々な方法で評価し、把握しようとした。まず、授業評価アンケートは、授業後の短時間で書いてもらったこともあり、回答された値にあまり信憑性が持てなかった。次に、授業中の発言の評価は、指名回数の差や回答内容の違いが大きく、評価が難しかった。そのため、有効性が予想される連想法による評価と、富岡(2015)によるルーブリック評価について検討することにした。

(7) 連想法による評価の調査の方法

H中学校C組とD組において、授業前に「トランペット」「母」「生きる」について、それぞれについて30秒間で連想させ、白紙に自由に記述させた。授業後にも同じ内容・手順で調査し、回収した連想語は、筆者が作成したカテゴリ(表2)に分類した。今回は、「トランペット」についての連想語からは、本時の目標に関わる評価が困難であったため、「母」「生きる」の

表2「母」「生きる」についての分類カテゴリー一覧

「母」カテゴリー	「生きる」カテゴリー
容姿	前向き(乗り越える)
態度	前向き
思い	生命活動
個性	実生活
嫌厭(反感)	繋がり
関係性	苦難
家事	価値づけ
その他	その他

⁵ ここに挙げている「連想法」とは上菰ら(2010)が提案したものであり、子どもの意識に映った授業を連想マップに描いてみせる評価法のことである。道徳授業を子どもの意識において評価する道徳の時間の評価技法として連想法を提案している。

⁶ 樋口耕一らは、開発したKH Coderについてホームページ上で「KH Coderとは、テキスト型(文章型)データを統計的に分析するためのフリーソフトウェアです。アンケートの自由記述・インタビュー記録・新聞記事など、さまざまな社会調査データを分析するために制作しました。「計量テキスト分析」または「テキストマイニング」と呼ばれる方法に対応。」と説明している。

<http://khc.sourceforge.net/>

2015年には、高知大学でもチュートリアルが行われた。

みの連想語について分析を行った。本来連想法は、連想マップから視覚的にその授業の効果
を把握することができるものであるが、今回は、授業前と授業後のカテゴリー別語数の変化
を考察し、授業の効果把握することにした。

さらに、「母」及び「生きる」のキーワードにおいて見いだされた回答語数に基づき、8つ
のカテゴリー別に、連想法の事前回答語数と事後回答語数に対して、 χ^2 検定を行った結果、
回答語数の変化量に有意差があったものを対象に、差違に関する理論的解釈を行った。

(イ) 連想法による評価についての結果と考察

授業前後の連想マップ(図1,2,3,4,5,6,7,8)を比較すると、C組では、母の「容姿」や「態
度」についての連想が減り、授業後は母への「思い」を連想する語に広がりが見られたこと
がわかる。また、生きることについて、「生命活動」や「実生活」に関する連想が減り、授業
後は「前向き(乗越える)」「繋がり」を連想する語に広がりが見られた。D組においても母
への「思い」に関する連想語に広がりが見られ、生きる中での「繋がり」に関する連想が広
がったことがわかる。

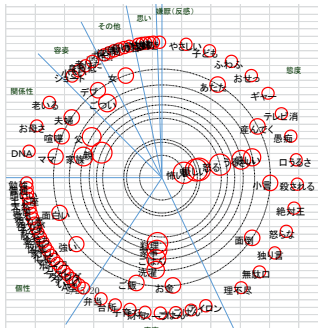


図1 C組「母」についての

カテゴリー別連想マップ(pre)

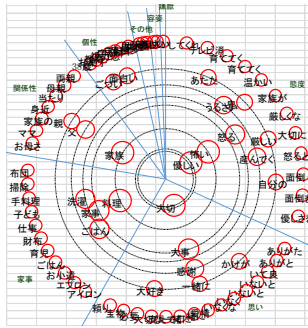


図2 C組「母」についての

カテゴリー別連想マップ(post)

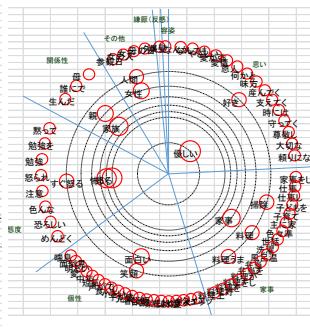


図3 D組「母」についての

カテゴリー別連想マップ(pre)

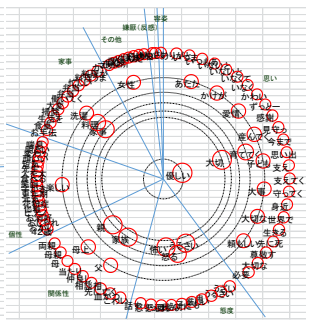


図4 D組「母」についての

カテゴリー別連想マップ(post)

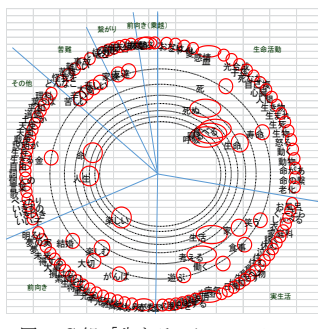


図5 C組「生きる」についての

カテゴリー別連想マップ(pre)

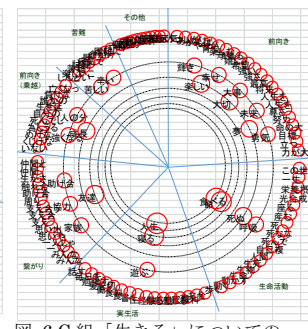


図6 C組「生きる」についての

カテゴリー別連想マップ(post)

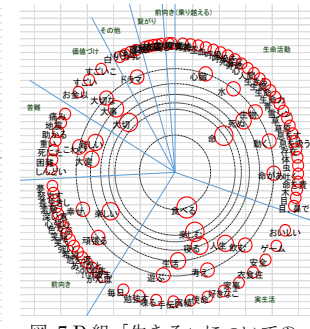


図7 D組「生きる」についての

カテゴリー別連想マップ(pre)

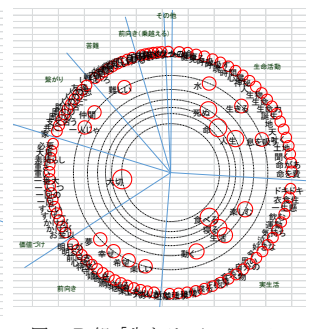


図8 D組「生きる」についての

カテゴリー別連想マップ(post)

C組とD組の「母」及び「生きる」のキーワードにおいて見いだされた回答語数に基づき、
8つのカテゴリー別に、連想法の事前回答語数 (pre) と事後回答語数 (post) に対して、 χ^2
検定を行った結果、表3,4,5,6のような結果が示された。キーワード「母」「生きる」それぞ
れに対して、回答語数の変化量に有意差があったもの(表3,4,5,6)を対象に、差違に関する
理論的解釈を行った。

【カテゴリ別回答語数 変化量一覧】

表 3 C組「母」

カテゴリー名	連想回答語数		χ ² 検定結果	
	(pre)	(post)	p値	有意差
容姿	9	2	p=0.035	*
態度	79	54	p=0.030	*
思い	5	45	p=0.000	***
個性	29	11	p=0.004	**
嫌厭(反感)	1	1	p=1.000	ns
関係性	23	21	p=0.763	ns
家事	30	33	p=0.705	ns
その他	8	3	p=0.132	ns

ns : not significant † p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表 5 C組「生きる」

カテゴリー名	連想回答語数		χ ² 検定結果	
	(pre)	(post)	p値	有意差
前向き(乗り越える)	1	13	p=0.001	**
前向き	9	25	p=0.006	**
生命活動	47	29	p=0.039	*
実生活	87	53	p=0.004	**
繋がり	13	23	p=0.096	†
苦難	17	17	p=1.000	ns
価値づけ	12	10	p=0.670	ns
その他	5	1	p=0.102	ns

ns : not significant † p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表 4 D組「母」

カテゴリー名	連想回答語数		χ ² 検定結果	
	(pre)	(post)	p値	有意差
容姿	1	1	p=1.000	ns
態度	23	24	p=0.884	ns
思い	31	67	p=0.000	***
個性	25	21	p=0.555	ns
嫌厭(反感)	1	2	p=0.564	ns
関係性	11	23	p=0.040	*
家事	27	20	p=0.307	ns
その他	9	10	p=0.819	ns

ns : not significant † p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表 6 D組「生きる」

カテゴリー名	連想回答語数		χ ² 検定結果	
	(pre)	(post)	p値	有意差
前向き(乗り越える)	2	6	p=0.157	ns
前向き	24	23	p=0.884	ns
生命活動	48	41	p=0.458	ns
実生活	46	40	p=0.518	ns
繋がり	5	14	p=0.039	*
苦難	15	11	p=0.433	ns
価値づけ	13	22	p=0.128	ns
その他	6	1	p=0.059	†

ns : not significant † p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

(ウ) 富岡(2015)のルーブリックによる評価の調査の方法

富岡(2015)は、「ねらいに対して子どもたちが、どのようにつかったのか、そしてどの程度つかったのかを評価すること」の重要性について述べ、その方法として、「今日の道德の時間で学んだことを書いてください」という教師の投げかけにより書かれた記述文を評価するためのルーブリックを作成している。本調査では、このルーブリックを用いて、H中学校での授業後の感想文を評価し、その有効性について検討した。

(エ) 富岡(2015)のルーブリックについての調査結果と考察

富岡(2015)のルーブリックを用いた評価では、価値の自覚の深まりの度合いを評価の基準としたため、「自分のこと」として真剣に考えていたかどうかに着目して評価が行われた。忙しい中、主観だけで評価を行っていたときなら、「ちゃんと聞いて(わかって)もらえなかった。」「あまりたくさん(真剣に)書いてもらえなかったな。」などと解釈していたかもしれない。しかし、価値の自覚の深まりの度合いを評価の基準としたことで、「自分のこととして考えているのに、ねらいにせまりきれず実践意欲が見られなかったのは、授業

表 7「今日の道德の授業で学んだこと」を評価するルーブリック(富岡)

の方法や生徒との関わりにどんな問題点があったのだろう。」「この感想文に書こうとした(言いたかった)ことを、理解するためには、また、授業の中で深めていくには、どうすればよかったのだろう。」など、生徒のことを理解しようとしながら授業を振り返る授業評価となった。つまり、「生徒理解」と「授業改善」を促すために有効な評価方法であったと言える。

段階	A組(n=33)	B組(n=29)	C組(n=32)	D組(n=33)	合計(n=127)
A	1	3	1	2	7
B	11	4	10	5	30
C-a	6	7	7	5	25
C-b	1	0	4	3	8
D-a	13	13	6	12	44
D-b	1	2	4	6	13

(2) 第2研究

道徳性の変容や授業の効果は、量的に把握することが難しい。このような「見えない力（学力）」を評価するために着目されるようになったのが、パフォーマンス評価である。感想文をパフォーマンス課題とし、授業を通しての道徳的価値の自覚の深まりの度合いを記述させることで「可視化」する。教師は、その記述からその背景を推論しながら解釈をすることで、「見えない力」にせまろうとするのである。パフォーマンスからの解釈は主観的な性格を免れることはできないが、主観的であっても恣意的、独断的にならないようにしなければならない。そのためにルーブリックを使うことが有効である⁷。本研究では、ルーブリック作成行程で行う分類についての解釈を、テキストマイニングを用いて、できるだけ客観的なやり方で行うことを試みた（図9,10参照）。第2研究で回収した127名分の感想文を、価値項目と価値の理解の自覚の度合い別の7グループに分類し、KH Coderを使用して計量テキスト分析を行った。分析結果に見られる特徴語を集め、評価の基準となる記述語の例を示したルーブリック（次頁表9）を作成した。

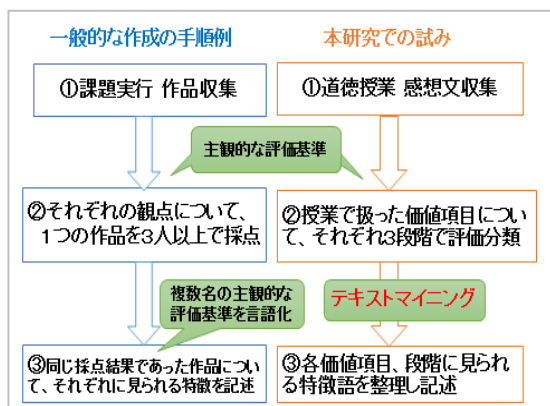


図9 「特定課題のルーブリック」の作り方（西岡 2015）を参考に作成

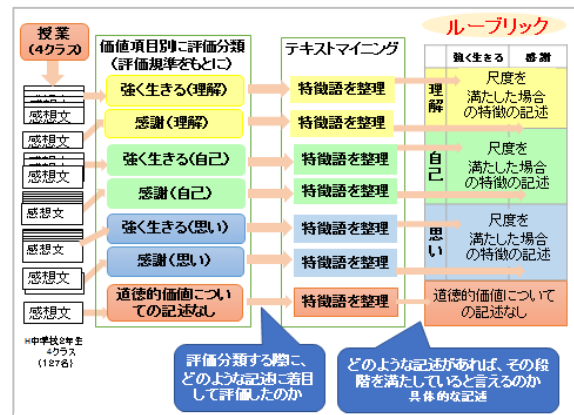


図10 ルーブリック作成の手順

ア 評価の視点について

道徳科の目標は「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、①道徳的諸価値についての理解を基に、②自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、③人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」ことである。そこで、評価の観点を、価値の自覚の深まりの度合いとし、この①②③の学習活動が授業展開にあったかどうか、これらの活動を通して、生徒の価値の自覚の深まりの度合いがどうであったかを評価することにした。①道徳的価値について理解する②自己との関わりを考える③思いや課題が培われる、の3つの項目を設け、授業後の感想文を評価するための評価の視点を作成した。（表8）また、本授業は「よりよく生きる喜び」を主題としているが、「感謝」についても関わりが大きい。そこで、「よりよく生きる喜び」（以下「強く生きる」と、予想される別の道徳的価値として「感謝」

表8 「亡き母へのトランペット」の評価の視点

道徳的価値について理解する(理解)	母の死による辛く苦しい悲しみの気持ちに区切りをつけて乗り越えていこうとする環瑠さんの生き方を通して、困難を乗り越え力強く生きることの素晴らしさを理解している。・支えてくれている人たちの思いやりや、その人々への感謝の気持ちに気付いている。・重荷にならないようにという配慮がなされた思いやりに気付いている。
自己との関わりを考える(自己)	悲しみや苦しみを乗り越えて強く生きることについて考え、自分自身を見つめている。・自分も家族や周りの人に支えてくれていることに気付いている。
思いや課題が培われる(思い・課題)	困難を乗り越え、力強く生きることが自分にとってどのような意味があるのかを考えている。・今、自分の周りにいる人たちの支えが、自分にとってどのような意味をもたらし、それに応えることの意味について考えている。
道徳的価値についての記述はない。	

⁷松下佳代『パフォーマンス評価』8,10,11頁 日本標準 第6刷 2014

松下(2014)は「見えない学力」の評価方法の1つとして、パフォーマンス課題のルーブリック評価について述べている。筆者は、この「見えない学力」を「道徳の時間での学び」「道徳性」と置き換えて使用した。

の2つについて、評価の視点を設定した。

イ テキストマイニングを用いたループリック作成について

対応分析プロット（図 11）からは、「思いや課題が培われている」に分類された感想文には、「生きる、乗り越える、困難、いこう、頑張る、～たい」などの特徴がありそうだと予測される。「道徳的価値について理解している」に分類されたものには、「トランペット、母、瑠璃、届く、コンサート、思い、祖父母、辛い、たくさん、演奏、祖母、舞台」など、資料に出現した語が多く用いられ、主人公の生き方について「すごい」、「素晴らしい」などと記述している傾向が見える。

「自己との関わりを考えている」と評価される感想文には「もし、本当に」などの特徴が、「思いや課題が培われている」と評価される感想文には、「生きる、乗り越える、自分、大切、今、いこう、～たい」などの特徴語があるように見える。自己との関わりについては、「意見、親、体験、本当に、もし、感じる、わかる、聞く」などの特徴があるようにも見られるが、語数（感想文数）が少ないことや、価値との関わりなしもほぼ同じ位置に重なってあるので、特徴としては判断しにくい。

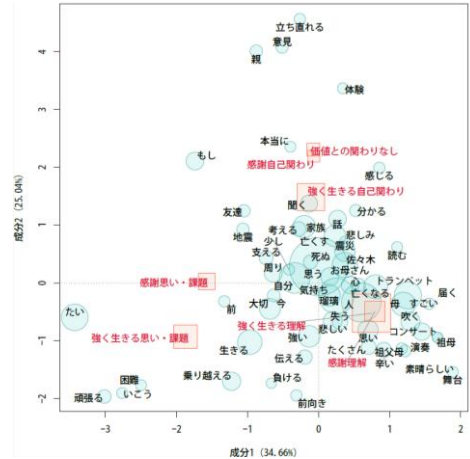


図 11 対応分析プロット図

さらに、「思う」「生きる」「頑張る」「いこう」「～たい」の主語が、生徒自身であるのか、資料中の人物であるのか、この図からは判断されない。そこで、7つの項目毎に分析を行い、抽出語リスト、共起ネットワーク、対応分析プロット、多次元尺度法、階層クラスター分析など、様々な図表を用いて検討した。また、特徴性が曖昧である語については文書検索を行い、原文中の文脈での扱いを確認した。例えば、「自己との関わりを考えている」に分類された感想文の特徴として曖昧であった「体験」という語は、【自分たちも体験するかもしれない震災について考えさせられるお話でした。】という文脈で使用されているため、「自己との関わりで考えている」と分類される感想文の特徴として判断されたと解釈できる。このような作業を重ね、「評価分類する際に、どのような記述に着目したのか」を分析し、「どのような記述があれば、その段階を満たしていると言えるのか」の解釈を行った。感想文の分析・解釈の結果からループリック（表 9）を作成した。

(3) 第3研究

ア 方法

道徳の授業後に生徒（32名）が書いた感想文を4名の教員で読み、第2研究で作成したループリックを基準に評価の視点を明らかにしながら授業の振り返りを行った。この評価の過程での教師の語りと、「道徳の授業とは～である」のインタビューの回答（5月、11月）、生徒のノートへのフィードバック（6月、12月）を分析し、これらの語りや記述に現れる授業観や生徒観に着目し、理論付

表 9 授業の感想文から道徳的価値の自覚の度合いを把握するためのループリック

価値	自覚の深さ	尺度を満たした場合の特徴
強く生きる	道徳的価値について理解している	・資料に描かれた主人公の生き方について、「素晴らしいと思う」「～したのはすごい」などと共感する記述や、困難を乗り越え力強く生きることの素晴らしいことについての記述がある。
	自己との関わりを考えている	「もし私なら～」「4年前の震災のとき私は～」など、主人公の体験や生き方と自分を重ねながら考えていることがわかる記述がある。
	思いや課題が培われている	「自分なら落ち込んで立ち直れない」など、自分の弱さにも気づきながら、困難に出会ったときにも「～することで乗り越えたい」「少しでも～人になりたい」など、自分なりの生き方について考えている記述がある。
感謝	道徳的価値について理解している	「～と気づいたから頑張れたと思う」「思いは伝えることができた」など、拍手を受けながら家族や周りの人の支えに気づき、その気持ちに答えようとした主人公の思いや生き方に共感している。
	自己との関わりを考えている	支えてくれている人々の気持ちに応えようとする主人公に自己を重ね、現在の自分を振り返り、家族の支えやその有り難さに気づいている。
	思いや課題が培われている	自分を支えてくれている人に感謝し、「辛いことがあっても～たい」「今自分を支えてくれている人々の思いに応えることで、困難を乗り越えようと思う」など自分なりの生き方が記述されている。
道徳的価値についての記述なし	「～はすごいと思う」「悲しい」「かわいそう」など、資料についての感想や、「～さんが発表していたの感動した。」など、友達や自分の発表の仕方についての記述である。	

けを行う方法で、「道徳の時間」の評価に必要とされる教師の資質・能力について検討した。

イ 結果と考察

ルーブリックを用いた複数教員による授業評価を行うことには、①短時間での授業評価が可能になる②生徒の特性を理解し、成長を認める評価や話し合いが促される③授業や生活を振り返り、文章には現れていない生徒の意欲を認める契機となる④共通の評価の判断基準として有効である⑤道徳的価値の自覚の深まりの度合いを把握するために有効である⑥生徒の発達段階や家庭環境を踏まえた上で生徒を認める評価が促される、という効果があることが明らかになった。また、これらの効果が見られるのは、参加者の中に熟達した教師がおり、協議の前に参加者全員が授業やルーブリックの内容について共通理解している場合である。複数教員でルーブリックを用いた授業評価を行うことで、「対話」を大切にしながら「個々の生徒を理解し」「共感」「アドバイス」「認め」「励ます」「理解を促す」など、個々の生徒に合わせて生徒を見る力が養われることも明らかになった。

4 総合考察と今後の課題

「道徳の時間」の評価は、その把握の難しさから実践がうまく進められてこなかった。しかし、本研究で有効性が認められた評価を用いれば、授業の効果や生徒の成長が実感できるようになる。生徒のよさや成長が見えるようになることは、授業者にとって大きな励みになり、教師の授業改善への意欲を高めていくのではないかと考える。また、効果的な評価が行われるためには、評価をするための教師の資質や能力が養われている必要がある。この資質・能力が養われるのもまた、評価の場面であり、複数教員による評価が行われれば、その効果はさらに大きなものとなる。今回は、この資質・能力について明らかにすることはできなかったが、これを解明し、共有していくことが、「道徳の時間」の評価をより効果のあるものにしていくことができると考える。

引用・参考文献

- 佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美.(1991).「教師の実践的思考様式に関する研究」.『東京大学教育学部紀要』第三〇巻,102~112頁.
- 秋田喜代美・佐藤学.(2006).著:「新しい時代の教職入門」.有斐閣.
- 松下佳代.(2014).「パフォーマンス評価」.日本標準.
- 上蘭恒太郎.(2011).「連想法による道徳授業評価－教育臨床の技法－」.教育出版 初版第1刷発行.
- 西岡加名恵.(2015).「逆向き設計で確かな学力を保障する」.明治図書.
- 中央教育審議会.(2014).「道徳に係る教育課程の改善等について(答申)」.
- 東京学芸大学「総合的道徳教育プログラム」推進本部 第1プロジェクト.(2012.2).「道徳教育に関する小・中学校の教員を対象とした調査－道徳の時間への取り組みを中心として－」.
- 東京学芸大学「総合的道徳教育プログラム」推進本部 第1プロジェクト.(2014.2).『過去の道徳授業の印象に関する調査－教職科目「道徳の指導法」の受講学生を対象として－』.
- 樋口耕一.(2014).著:「社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して」.ナカニシヤ出版.
- 富岡栄.(2015).「道徳の時間の評価に関する実践研究－教科化に向けての取り組み－」.著:日本道徳教育学会,『道徳と教育』第59巻.
- 文部科学省.(2016).「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」(報告).